

## 堀氏の沿革

堀氏は、弘安五年に吉見頼行が能登から木部に入部した際、頼行に従って来た堀新左衛門という人物が吉見氏の物頭をつとめ、命に応じて戦役に参加していたという。吉見氏は殖産を奨励し、特に銅の掘削においては堀氏を山口の長登銅山に派遣、後に銅山方主任として、畑迫の山の内、木部の石ヶ谷、笹ヶ谷の三カ所で採掘を始めたと考えられている。堀氏は吉見氏の器物、武器、建築用資材の製造を行うとともに、副産物であった亜硫酸は大森代官所に収められ、鼠の防虫剤として「石見銀山鼠捕り」として江戸でも多く出回った。

与三右衛門親正（一九世紀半ばに大森代官に提出した「由緒書」によると、与三右衛門を初代としている。本文では以後与三右衛門を初代とする。）は銅山掘削の業績を称えられ銅山衆を命ぜられ、苗字帯刀を許されたという。吉見氏の萩への撤退後いったんは萩に赴いたが、その後帰国して畑ヶ迫村に居住し、石見銀山奉行をつとめた大久保長安の支配下で、銀と銅の採掘に従事した。与左衛門は銅山の規模をさらに拡大するとともに、笹ヶ谷からの副産物であった緑青群青等の顔料の製出によってその名声は益々上がっていった。

三代の市右衛門の時には、「畑ヶ迫銅山」は一旦衰え、四代の弥右衛門の時、笹ヶ谷銅山の経営を命じられ、他の経営者とおもに自己資金を投じ経営に参画したという。五代、六代についての詳しい経歴は資料がないため不明である。

七代の権右衛門は、大森代官による「銅山御見分御廻村」の節には、「御宿」をつとめた。これ以降、代々廻村時には宿を提供するようになる。

津和野藩亀井氏三代茲親は、元禄八年（一六九五）の江戸中野村に犬小屋造営の際、また宝永五年（一七〇八）三月の皇宮炎上の折の紫辰殿、清涼殿南門などの普請の際などに堀氏に借金の申し込みをしている。堀氏は亀井氏のみならず、長門の毛利氏、浜田の松平氏などへも莫大な費用を貸し出している。代々の藤十郎は御領地付近の道路や河川の修繕、役所や病院等の公共施設などへの寄付活動も積極的に行っている。享保一八年（一七三三）正月八日に、本宅が火災に遭い、表門以外は焼失し、これ以前の古文書も失われたという。

八代の伴礼の代から堀氏は代々藤十郎を名乗る。伴礼の代、延享年中（一七四五～八）においては笹ヶ谷銅山の坑道が浸水し、水抜き工事が開始されている。しかし、宝暦十四年（一七六四）には、銅の産出量が衰え休山に追い込まれている。九代の伴義の代において、笹ヶ谷年寄役、銅山師上席となった。また、中木屋村の青木七左衛門が「白目稼」を再開、寛政元年ごろから掘削が始まったとされるが、その後は休山や再開を繰り返している。

十代の藤十郎伴徳の代、十一代の藤十郎伴通の代においても笹ヶ谷年寄役、銅山上席を務めたが、笹ヶ谷の坑道の浸水のため水抜き工事が終了するまで休山することとなった。

この間、堀氏は文政七年（一八二四）～十一年（一八二八）にかけて石見銀山の経営難を救うため、金三千両を融通している。笹ヶ谷の経営が行き詰る一方で、多額の融資が可能であった。十二代藤十郎伴通は二十九歳の短命で死去している。

十三代藤十郎（伴良）のとき、笹ヶ谷銅山年寄役に就任し、銅山師上席となった。天保八年（一八三七）に鉦脈に行きあたり、その後次々に鉦脈を発見、隆盛を極めた。この間、経営不振に陥った日原村の三好家の銅山株を堀氏が金五十両で買い取っている。弘化三年（一八四六）には笹ヶ谷銅山の「取締総年寄」に任じられている。伴良はこのほか代官所のある大森から荷物の積出港である郷津までの道路の改修を行うとともに、港湾の修理なども行っている。嘉永四年（一八五一）には、畑ヶ迫村外四ヶ村取締役に任じられている。

殊に嘉永六年（一八五三）、ペリーが軍艦を率いて和親通商を迫った時、幕府は品川天保山へ砲台を築いたが、堀氏は五千両と精銅一万斤を献納した。藩内においても非常時に備え剣銃の操縦練兵を習わせ、かつ兵器や被服も準備したが、この費用も堀氏が負担している。また、津和野藩主の侍医吉木陶伯は、堀氏に長崎での学費の捻出につき懇願し、長崎でオランダ人シーボルトに蘭医方について教えを受けることができた。藩主茲監は陶伯の子、蘭齋を長崎に遣り二度にわたりシーボルトに師事させた。帰藩後は養老館に医学館を新設するとともに、蘭齋を館長として藩内に種痘を行うことを命じた。

慶応二年（一八六六）四月五日、幕府は長州征討の命を下し、津和野藩保護のもと軍目付長谷川久三郎が津和野城下に入った。長州藩は軍目付の身柄引き渡しを津和野藩に乞い、津和野藩は生命の安全を条件に引き渡すこととし、幕府直轄領の堀氏の立ち会いのもと野坂峠で長州藩へ引き渡した。

十四代藤十郎（伴成）は病気がちで、明治八年（一八七五）早々に礼造に家督を譲っている。

十五代藤十郎となった礼造は二男の昌造とともに藩校養老館、漢学教頭山口弘烈の家に寄宿し勉学に励んだ。家督相続後は専ら鉦山業に励むかたわら、明治十二年から十四年までは畑迫村の戸長を勤め、福岡から教師を招き畑迫地内の土地改良を実施、水稻の増収に努めた。

鉦山経営は笹ヶ谷を主たる採掘場とし、邑智郡の銅ヶ丸、美濃郡の都茂、出雲八束郡の宝満山、摂津の多田山、山口県美祢郡の長登、その他因幡、丹後、九州方面にかけて数十カ所の銅山を経営し、世間では堀氏を以て中国地方の銅山王と称した。明治五年（一八七二）ごろからは火薬による発掘法が用いられるようになった。また、明治十七年以降は工学士都野豊之進を雇い、鉦業視察のためアメリカに派遣した。都野は帰国後、製錬工場や機械選鉦場などを改善するなど鉦山の開発に大いに努め、銅の生産も盛況を呈することとなった。銅山経営も大正九年（一九二〇）には堀鉦業株式会社に引き継がれ、日清、日露戦争後は笹ヶ谷と石ヶ谷の鉦山を残して漸次銅山は売却した。同社も昭和三年（一九二八）には解散している。そして笹ヶ谷銅山も日本工業株式会社に営業委託し亜ヒ酸を製造した

が、昭和二十四年（一九四九）に廃山となった。

礼造は銅山経営の傍ら明治二十五年（一八九二）巨費を投じて畑迫病院を創設し、慈恵の念を持って地域医療に貢献した。さらに大正六、七年には莫大な費用を投じ手術室や病室などを増築、いち早くレントゲンなども取り入れている。官立の病院はともかく、私立の病院で当時このような先進的な治療器具や薬品を取り入れていたのは稀に見る施設であった。

礼造一代の寄付金義捐金は三十万円以上といわれ、その為に受けた金杯、銀杯は百三十以上であった。特に松江高等学校や津和野高等女学校、津和野中学校の創立のために費用を援助するなど、教育のために支出した額は相当なものであった。このほか、J R山口線設置のための測量調査費や、石見水力発電株式会社などの設立も礼造によるもので、地域経済や教育の発展に尽くした彼の業績は計り知れない。

津和野町教育委員会

#### 参考書籍

「畑迫堀家略史」 澄川正爾 『島根県地方史研究』

旧堀氏庭園調査報告書 津和野町教育委員会